中国竹紙紀行～竹紙のふるさとを訪ねて～

（調査時期　2005 年 8 月）

小林亜里

1. 四川省編

竹紙の店を始めたときから、いつかは実現したい一つの目標があった。「竹紙の専門店」と名乗った以上、国内外を問わず、世界中の竹紙を作る場所で、竹紙を作る人やそのようすを見てみたいと思っていたのだ。そんな私に格好のチャンスが訪れた。娘が中国の大学に 1 年間留学することになり、一度は様子を見に行こうと中国行きの名目がたった。ならばついでに日本竹紙の源流である中国竹紙の郷を訪ねてみてはどうか、と家族をさりげなくそそのかし、じつは娘を通訳に、夫をカメラマンに、息子を荷物持ちに仕立てるべくもくろんで、2005 年 8 月、往復飛行機だけを取り日本を出発したのだった。

竹紙のふるさとはどこ？

8 月 15 日、中国湖南省の長沙（娘がいるところ）空港から成都行きの飛行機に乗った。その年は春から中国国内で反日感情が高まり、デモやトラブルも報道されていた。おりしも移動日は終戦記念日当日。機内で新聞を開くと、「祝・抗日勝利 60 周年記念！」の見出しが踊り、東条英機以下数十名の戦犯日本人の写真が紙面を飾っていた。日本では戦争は遠い過去のことのように思う世代でもあり、戦争には反対こそすれ、自分が戦争責任の側にいるという認識はほとんど抱いたことがなかったが、中国ではなんだかほのかな罪悪感すら感じてしまい、日本人だとわかったら何か言われるかも？とちょっとドキドキしてしまった。でも、個人で旅をする私たちに悪口を言う人はだれもおらず、旅の間中、日本人だということでいやな思いをすることは一度もなかったということを、両国の友好のために一言言っておきたいと思う。

さて、成都に行ったのは,四川省の夾江というところに竹紙の産地があると聞いていたからだ。四川省はパンダのふるさとでも知られるとおり竹の豊富なところである。町の中にもさまざまな種類の竹が見られる。日本のように太い孟宗竹は少なく、細い株立ちの竹が街路樹のように植えられている。

夾江は地図で調べると成都の南側にあり崖に彫られた磨崖仏で有名な、楽山という世界遺産のやや近くにある。世界遺産になっているくらいの場所なら、行く方法はいろいろあるだろうと成都で調べてみると、いくつか長距離バスが出ていることが判明。夾江行きの長距離バスもあるとわかり、翌日出発と相成った。

中国は近年高速道路建設ラッシュで、数年前までは夾江や楽山への道もずいぶん時間がかかったそうだが、今では高速バスで成都から 2 時間あまりの距離だ。夾江へはすいすいと着いたものの、実は、そこから先の情報は日本では何も得られていなかった。夾江は観光ガイドなどには全く出てくることもない、なんの変哲もない地方の町で、ましてや竹紙の産地などという情報が出ている本は、一冊たりとも見つからなかったのだ。そこで、夾江のバスターミナルにたむろする運転手さんや車掌のおば

ちゃんを捕まえては、娘の通訳で竹の紙を作っているところを知らないかと片っ端から聞いて回った。すると、「それなら〇〇村で作っている」といい出す人が現れ、向こうのバスが行くという。バスの所に行くと、車掌のおばちゃんが、「バスはもう出るわよ。どうするの、あんたたち。乗るの？乗らないの？」と急かすので、「ようわからんけど乗っちゃえ！」と、言われるままに小さなおんぼろバスに乗り込んだ。

バスは 15 人乗りくらいの田舎のガタゴトバスで、全員地元とおぼしき乗客たちは、見慣れぬ私たちに興味津々の様子。「どこから来たの？」「どこへ何しに行くんだ？」と目を丸くして聞いてくる。道は高速道路から一転して舗装でなくなり、バスももちろん空調はなし。開け放った窓からは、赤土の土埃を巻き上げた真夏の風が大胆に入ってくる。

農家の点在する細い山道を数十分走り、これまで見たこともないほど辺鄙な田舎まで来たころ、車掌さんが「ここに竹紙の会社がある」と教えてくれた。あわててバスを降りる。そこは村の小さなメインストリートといった感じで、水たまりのある未舗装の道の両側には、野菜や乾物、雑貨を並べた露天の店が並んでいる。歩く村人や自転車に混じって、犬や鶏も残飯をあさってうろついている。

少し歩くと、確かに紙の会社があった。書道半紙のような全紙サイズのキナリ色の紙が積まれ、この田舎には不似合いともいえるそこそこの規模の会社である。早速入り口付近にいる作業員風の男性 2 人に「これは竹の紙ですか？」と尋ねると、そうだとの返事。やったぁと小躍りして、竹の紙を作っているところを見せてほしいと頼むと、あっさり断られてしまった。「許可がないとだめだ」というの

だ。「許可ってどこで何を？」と聞くと「成都の公安へ行って許可をもらってこい」との返事。成都までは数時間の道。ようやくここまでたどり着いたのにそんな・・・と食い下がって頼んだが、先方はとりつくしまもない。さすが社会主義の国。個人の規模でやっているところではなさそうで、この男性たちに頼んでも答えは出そうにない。短い村のメインストリートを端まで歩いてみたが、生活の店があるだけで、ほかには紙屋さんはない。仕方なしに屋台の饅頭屋で肉まんを買って食べて露天の店をのぞいていると、店の人や通行人と話が広がった。

「こんな所に何しに来たの？」「日本から」「なに、竹の紙を探している？」「作っているところをみたいんだって」「あそこに紙の会社があるだろう」「見せてもらえなかったんだってさ」。観光客、ましてや外人など来ることもないような村だから、村人たちは、何事かとのぞき込み話に加わる。と、一人の通行人が「夾江には竹の紙の博物館があるよ」といいだしたのだ。

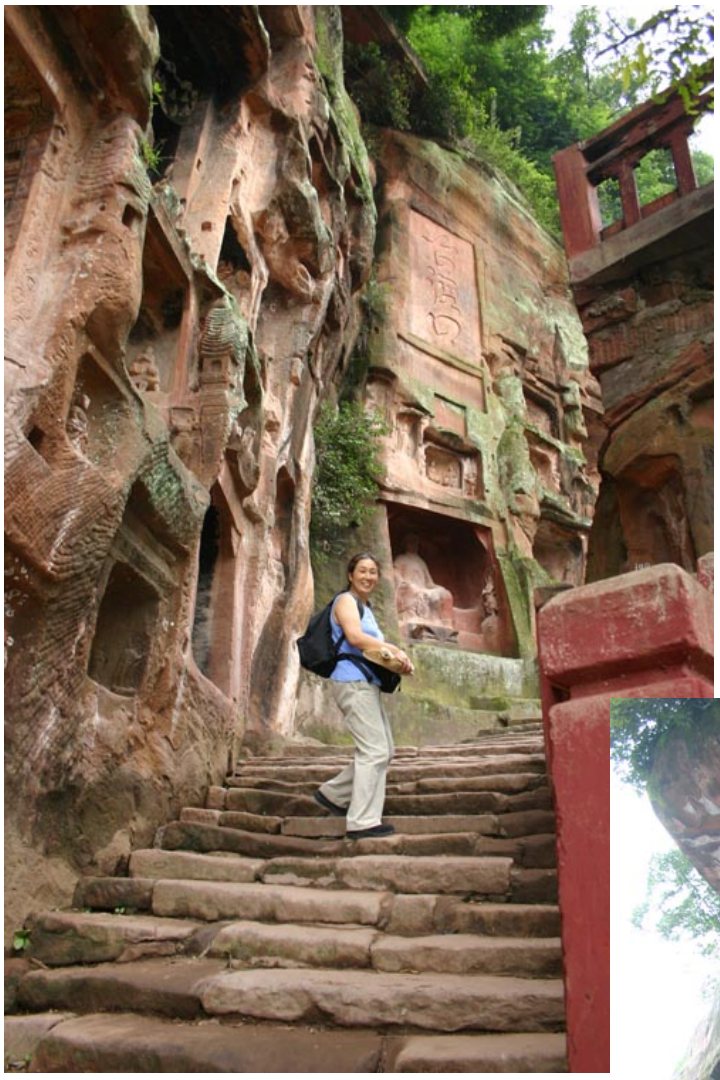
「ええっ！どこですか？」思いがけない情報に驚き、博物館の地名と名前を書いてもらった。今はそれしか情報はないのだから、とにかくそこをめざしてみようと決め、再びがたごとバスにゆられて、夾江の町へと戻った。

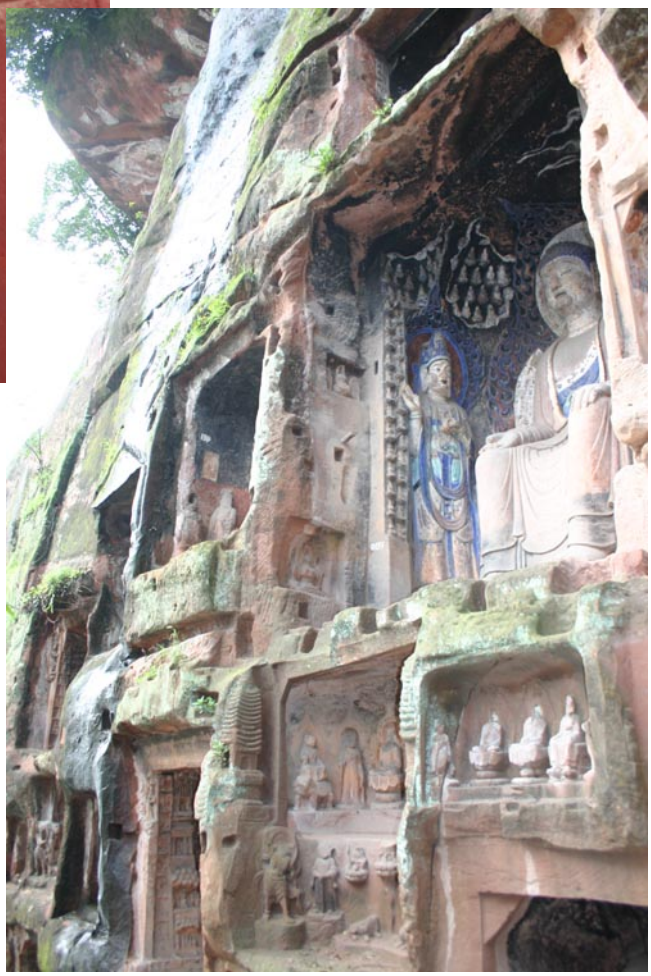
竹紙の博物館へ

夾江から博物館への行き方はさっぱりわからなかったので、奮発してタクシーに乗り込んだ。博物館がそう離れた田舎にあるとは思えなかったので、町のどこかにあるのだろうとあたりをつけていたのだ。ところが、タクシーはどんどん郊外へと走っていく。道の真ん中でトウモロコシを干したりしている農家をいくつも過ぎ、かなりの距離を走ったころ、到着を告げられた。これまた何もない山と川のほとりだ。ここはいったいどこ？と辺りを見回すと、地図があり、奥手に確かに造紙博物館の文字が見える。

この一帯はちょっとした史跡になっているらしく、博物館への道は、タイムスリップしたような古い集落だ。他の町ではもう見かけることのない青い国民服のおじいさんや、纏足かと思う小さな靴を履いたおばあさん、毛沢東の肖像もある。次第に道はうっそうとした山道になり、周りの崖には細か

なたくさんの彫り物が出現する。赤い土肌一面に磨崖仏が彫られているのだ。
その後世界遺産の楽山にも行ったが、ここの磨崖仏は、大きさこそ小粒だがひけをとらないすばらしい彫り物で、観光客の多い楽山に比べ、誰一人いない自然の山中で歴史と文化を感じられる希有な場所だった。





汗をかきかき山道を進むと、奥手の山の上にまるで竜宮城のように忽然と赤い建物が見えてきた。それが私たちのめざす四川省夾江造紙博物館だった。山門のような入り口をくぐると、そこには中国の竹紙の歴史がたっぷりと詰め込まれていた。

竹柵にはじまり、元の時代の竹紙、明の時代の竹紙と、竹紙が時代順に陳列ケースに並んで保存されている。1000 年前の竹紙が今なお確かに残っていることに驚きを覚える。

我等が竹紙づくりのバイブル「天工開物」の絵も展示されている。「天工開物」は宋の時代に書かれた中国の技術書ともいうべき古書で、竹紙の作り方が絵とともに図解されている。私たちは（というよ

り水上勉氏は)、その本の記述に基づいて竹紙作りを日本で復元製作してきたので、ああ、中国でもやはりこれが基本なのか、と改めて感慨が沸いてくる。展示写真も、竹を切る様子から煮熟、漬け込み、叩解、紙漉と、村人たちが総出で協力しあってやっているような様子が写されパネルになっている。

「天工開物」の絵の通りの風景だ。この一帯は昔から造紙の郷として知られるところだったらしい。

竹を煮たり搗いたりする古い道具も展示されている。紙漉の簀は、竹で極細・繊細に作られ、きれいに漆を塗られており、見事な作りだ。2 メートル以上の漉き枠もある。また高さ 3 メートル以上の竹を煮るための大きな木製の釜が実際に展示されているのを発見したときは、思わず「これだ〜！」と叫んでしまった。この大釜は、「天工開物」の絵ではおなじみだったものの、日本では使われていないので、中国の歴史上にタイムスリップでもしなければ、お目にかかることはないのかなと思っていたのだ。それを目の当たりに見ることができるなんて、それだけで来た甲斐があったというものだ。

展示に見とれていると、先に行った息子に別室から手招きされた。何かと思ってそちらの部屋へ行くと、なんとそこでは、紙漉の実演がおこなわれていたのだった。

徐さんとの出会い

紙を漉いていたのは、徐良云さんというおじいさん。聞けば 16 歳のときから 70 歳過ぎの現在まで

夾江の村で竹紙を作り続けているとのことだ。徐さんは極細の竹籤に漆を塗った簀を使い、いとも簡単に水槽からすいすいと紙を漉いていく。方法としては、私たちのような木枠ごと漉いてそのまま干す溜め漉きではなく、日本の伝統和紙に近い流し漉きのようで、漉いては紙を重ね、水を絞って干すというやり方だ。

思いがけない出会いに感動し、竹紙の産地と作り方を見たくて日本から来たこと、日本で竹紙の専門店を営んでいることなどを興奮して話すと、徐さんはとても喜んでくれた。そして、私が日本から持参した自作の竹紙を見せると、今度は徐さんが興奮する番だった。館内で施設管理する人とともに、紙を見ながらああだこうだと熱く話している。互いに聞いたり話したいことがいっぱい沸いてきて、専門的なことも含め、矢継ぎ早にあれもこれもと質問を飛び交わせていると、娘が音を上げた。「ごめん、さっぱりわからない！」娘はまだ中国に行って半年で、語彙も十分ではないこともあるのだが、どうやら徐さんたちも興奮して地元の言葉でまくし立てていたようだ。中国では標準語とされる北京語以外に、隣村でも言葉が通じないときがあるというほど、さまざまな方言があるらしい。

　まあいいのだ。今回の大きな目的は、中国の竹紙づくりの細かなノウハウを知りたかったわけでは

なく、世界のどこで、誰が、どうやって竹紙を作っているのか、この目で見てみたかったということなのだから。それがかなっただけで十分だ。

徐さんは博物館をずっと案内してくれ、一角にある紙の始祖、蔡倫をまつった祭壇にも連れて行ってくれた。私たちは今日の自分たちがあることを蔡倫の石像に感謝して手を合わせた。

最後に私と徐さんは互いの作った竹紙を交換しあって別れた。徐さんは博物館の奥にある自分の寝室（昔の中国映画に出てくるようなかわいい蚊帳つきのベッドのある小部屋だった）から自作の紙を出してきて「それ、売るのか？」と聞く管理人に、「いいやあげるんだ」と誇らしげにいって、私に持たせてくれたのだった。国や言葉を飛び越えて、ものを作る者同士が分かり合える、嬉しい出会いだった。

2. 福建省編

旅の後半には、中国の東南部、福建省の竹紙づくりを見に行った。福建省もまた竹の多いところで、古い中国の文献にも竹紙の産地として記述がある。中国の古書「蘇易簡紙譜」には、紙を作るのに「蜀人は麻を以てし、門人は嫩竹を以てし、呉人は繭を以てし、北人は柔皮を以てし、端渓は藤を以てし…楚人は楮を以てす」と記されている。この門人というのが南方の福建省周辺の人のことで、水上勉氏や久米康生氏の造紙研究の著書にも、しばしば福建省の名前が挙がっているのを知っていた。

テラでも、山梨県で文具四宝の会社を営み、中国と交易のあるＫさんという方から、以前に中国の竹紙の話を伺い、福建省の手漉竹紙を取り寄せたことがあった。私たちの手漉き竹紙とはだいぶ感じの違う、半紙のような薄手のなめらかな紙で、これが本当に手漉き竹紙なのかなあと気になっていたのだ。

そこで、今回は、K さんにお願いして、その福建省の竹紙会社に事前に連絡を取ってもらい、あらかじめ先方に伺う約束をしていた。一応約束して会社を訪ねるのだから、あまり失礼があってはいけないと思い、通訳も、娘だけでなく、娘の推薦する中国人の友人・曾莉芬さんにも同行をお願いしてあ

った。莉芬さんは、娘と同じ大学の日本語学科を昨夏卒業し、現在中国政府の奨学金で日本の大学院に留学中（この時は留学前で在中していた）の優秀なお嬢さんだ。過去にも日本に 1 年の留学経験があり、日本語はぺらぺら（はっきり言ってわが子たちより語彙が豊富）のみならず、娘に言わせると、物事をはっきり言うのが当然の中国人の中で数少ない、曖昧なニュアンスの日本語を理解する中国人なのだそうだ。

私たち一行 5 人は、福建省の港町、アモイを起点に、またまた長距離バスに乗り込んだ。めざすは、内陸部の連城という町だ。K さんからは、アモイから連城へはタクシーで 8〜10 時間かかると聞いていた。しかも、途中の道は、工事や事故や崖崩れなどでしばしば通行止めになることがあるから、必ず水と食料を常備していくようにと忠告を受けていた。しかし、ここでも中国の近代化は猛スピードで進んでおり、できたての高速道路のおかげで、アモイから途中の龍岩という町へは高速バスで 3 時間弱、そこでバスを乗り換え、次のバスは空調はなかったが、また 3 時間弱で連城に着くことができた。途中はのどかな農村で、道路の両側に広がる竹藪とバナナの畑が同居する光景が、なんだか見慣れない不思議な印象だった。

竹紙の会社を見学する

連城の町からそう遠くないところに、教えていただいた竹紙の会社があった。訪ねると、場長の江道水さんをはじめ、副場長や経理主任など、社員の方々がずらりと並んで私たちを出迎えてくれた。恐縮しつつ自分と家族を紹介する。日本から竹紙の会社を経営する人が見に来ると聞いて、もしや大取引を期待して胸弾ませておられたのではないだろうか。それが、現れたのはリュックを背負った変な家族連れで、「あれえ、こんなやつらか」と実はがっかりしているのではないか、と不安がよぎる。でも場長の江さんは、そんな様子はまったく見せずに、私たちを暖かく迎えてくれる。「私たちを紹介してくれた K さんは、自分の大切な友人だ。その友人が紹介してくれたあなた達もまた、自分にとっては大事なお客様だ」と江さんは言ってくれるのだった。

まずお茶をごちそうになったあと、社内にある紙の倉庫や、できあがった紙の検品の様子を見せていただく。倉庫にはさまざまな竹紙が数メートルの高さに積み上げられている。薄くて白っぽい竹紙、やや黄みがかった竹紙、長さが 2 メートル以上の紙もある。江さんの説明によれば「福建省は古くか

ら竹紙の産地として知られているが、その 95 パーセントがここ連城で作られている」とのことだ。江さんの会社では、日本や韓国から紙の注文を受け、近隣のいくつかの工場（作業場）に依頼して紙を製作、できあがった紙をここに集めて注文に応じた形にして輸出しているそうだ。この会社で作られる紙の 95 パーセントが日本用の書道半紙、5 パーセントが韓国用の書道紙やふすま紙と聞き、そんなに日本に竹紙が入ってきていることに驚きを覚えた。ただし、ここで作る紙はすべて 100%竹紙というわけではなく、竹紙に麻や楮の紙を混ぜたりして仕上げているものもあるとのことだ。

私が中国での竹紙の生産状況を尋ねると、江さんは「竹紙は、原料の竹は安いが、作るのに手間暇がかかり、利益効率が悪い。中国政府は現在麻や楮の紙をより奨励しており、竹紙は厳しい状況だ」と言っておられた。この日は到着がすでに夕方だったので、連城の町に泊まり、翌日ゆっくり竹紙の製作現場を見せていただくことになった。

ホテルに荷物を入れ一服していると、江さんの会社の経理主任、周さんが晩ご飯をごちそうしますと迎えに来てくれた。言われるままに、我々一行 5 人はぞろぞろついていく。案内された店に着くと、個室に場長の江さん以下、会社の役員 4.5 人の方々が勢揃いしていた。

連城は田舎の町だし、ごちそうなど期待してはいなかったのだが、次々出てくる料理を見て私たちはびっくり仰天。イノシシの炒め物、ウサギの煮物、鶏 1 羽のゆでもの（上には顔までついている！）野鴨が丸ごと入ったスープ（姿作り風に全身入っていて、くちばしが鍋から突き出ている！）、めずらしい湖魚や川魚、そしてさまざまな野菜や山菜、栗やキノコの炒め物や煮物。どれも食べたこともない珍しいものばかり、盛りつけも美しく、量も半端でない多さだ。

私たちが目を丸くしつつおいしくいただいたのは言うまでもないが、さらに驚いたのは乾杯だ。みなで円形テーブルを囲んで食事をしていたのだが、江さんをはじめ、居合わせた方々が、食事中にひ

とりずつおもむろに立ち上がり、「小林さん一家の中国訪問を祝して乾杯させてください」といってお酒を注いで乾杯してくれるのだ。そのたびに私たちは立ち上がり、注がれたグラスを飲み干す。一人終わると次の人が、また終わると次の人が、と全員が乾杯してくれて、たいへんな乾杯責めにあった。夫だけはひとり予防線を張り、一番最初に「僕はお酒が全く飲めないので失礼をお許しください」といって、ウーロン茶で許してもらえたのだが、他の 4 人は乾杯のグラスを次々と干さねばならず、見る見る真っ赤になってしまった。19 歳の娘も、高校 2 年の息子もまた…。でも、中国の客人へのもてなしの古き良き伝統をかいま見たようなひとときだった。

紙漉場を巡る

翌日は朝 8 時に周さんが車で迎えに来てくれた。1 日がかりで点在する紙漉場を見て回る計画なのだが、まずは朝食だ。昨晩から、朝食は豚の内臓料理を食べましょうと誘っていただいていた。朝から内臓料理？と、ちょっと心配だったが、この辺の名物料理なのだそうだ。そして「なんといっても内臓は朝が新鮮でいい」と周さん。周さん、それっていったいどういう意味ですか！？

その日の朝食メニューは、お粥、スープ、餃子、香草入りの蒸しパン、米で作ったどぶろくのようなお酒がたっぷり入った飲み物、そして山盛りの豚の内臓のボイルしたもの。これは心臓、これはレバー、これは大腸と教えてもらいながら、刻みショウガや薬味の香草をたっぷり乗せて食べるゆでたての内臓料理は、意外に生臭くなく、想像以上にあっさりおいしいものだった。やっぱり決め手は新鮮さだったのだろうか。

さて、いよいよ紙漉場へ向かう。電車もバスも通っていない地域なので、江さんの手配してくれたワゴン車で回る。もちろん江さんも一緒だ。道には牛や鶏、犬そして人が自由に行き交い、田んぼでは鴨が家族連れで鳴いている。

紙漉場は工場といっても取り立てて機械があるわけではなく、がらんとしたコンクリートの建物の中には、いくつかのコンクリートの水槽と、材料が回りながらつぶれていく大きなミキサーのような？簡単な装置がある程度。それぞれの水槽の前ではおじさんたちが紙を漉いている。確かにすべて手漉きだ。桁のついた漉き枠に竹に漆を塗った簀がはまっていて、それで水槽の中の材料を何度か揺すって漉き返し、簀をひっくり返して漉いた紙を重ねていくやり方は、夾江の徐さんがしていたのと同じだ。時々横の小水槽から大きなひしゃくのようなもので水槽に何かを入れてはかき混ぜている。聞いたところ、ネリを使用しているとのことだった。江さんや作業にあたる人からは、このやり方は、基

本的には昔から受け継がれた伝統的な方法だとの説明を受ける。私は、材料にネリを入れ流し漉きする紙漉方法は、日本の和紙が独自に発展させた方法だと読んだり聞いたりしたおぼえがあるが、中国ではどのくらい前からこの方法をおこなってきたのだろう。私自身は水上勉氏に習ったやり方を踏襲し、ネリを入れずに溜め漉きをしているのだが、中国でも、もともとは原始的な溜め漉きだったものが進化して、流し漉きに変わっていったのだろうか？それはいつ頃のことで、日本との違いはどのように生まれていったのだろう？また、現代日本の和紙に反して、竹紙作りではなぜネリを入れない形が広まっていったのだろう。新たな疑問がさまざまわいてくる。

漉き枠はかなり大きなものあり、漉き手の人たちは、2m以上の紙もいともたやすく漉いている。みんな地元の人たちで、昔から紙漉をしている熟練の職人さんだそうだ。ここの人たちは 1 日にひとり約 1000 枚の紙を漉くとのこと。大いに尊敬する。場長の江さん自身、16 歳から紙漉に携わり、もう 40 年も紙漉に携わっているとのお話だった。

私はぜひ竹を漬け込んでいる場所を見たかったのだが、場長の江さんに聞いたところ、「竹を漬け込んでいるのはかなり山奥の溜め池で、行くのも大変な場所だし、臭いがくさいから無理だ」とのこと。今回は残念ながら見ることはできなかったのが少し心残りだった。

福建省の紙漉場で意外だったのは、竹紙作りの工程の中で、竹を煮る作業がなかったことだ。四川省の夾江では、写真でも展示物でも大釜で竹を煮ていたことがわかるし、「天工開物」にも材料を煮る絵があったから、当然煮る工程は基本としてあるはずと思っていたのだが、通訳の莉芬さんに何度確認してもらっても、ここでは竹は煮ないという。孟宗竹の若竹を切り、山奥の小さな湖に浸けて軟化させてから取り出し、その後はいきなり苛性ソーダを入れてミキサーにかけてパルプ状にしてしまうというのだ。これは大きな違いだ。私たちが竹紙を作っている際にも、4、5 年漬け込んだ竹ですら、3 日ほど煮なければ、とてもパルプのようには柔らかくならない。薬品をかなり入れて作業しているのだろうか？　でも、そうだとしたら、昔は苛性ソーダなど使ってはいなかっただろうし、どうしていたのだろう。近代化の過程で方法が変わったのかもしれないと思い、そのへんのことも聞いてみたが、やはり「昔からこうやっている」との返事だった。竹紙に限らず、中国の少数民族の紙作りなどでも煮ないで紙を作るところがあると久米氏の文献で読んだことがあるが、この地域のやり方なのだろうか？　結局、なぜここでは竹を煮ないのか、詳しい理由はわからなかった。今後ぜひ機会を得て、さらに調べてみたいものだと思う。

作業工程の中で、よい方法だと思ったのは、漉いた紙を乾かす際に、鉄板に張って干しているのだが、鉄板を直に熱を加えるのではなく、お湯を循環して暖め、その熱で紙を乾かしていたことだ。作業の人たちは重ねて水切りした紙を一枚ずつ巧みに剥いで、刷毛を使って鉄板に張っていくのだが、作業をする人にとっても熱でけがをすることがなく安全でよい、と江さんも言っていた（ちなみに、私たちはといえば、溜め漉きして木枠のまま天日干しする形を原則的にしているので、こうした方法はとってはいない）。

竹紙の今後・これからの課題

私たちは江さんと 4 つの工場を見て回ったが、伝統的な手法にちょっと変化があったのは、第 2 工場だ。ここは江さんの息子さんが 27 才の若さで工場長を務めている。第 2 工場だけは、紙を漉く作業

に少し自動化が取り入れられており、材料の入った水が、漉き枠の上に自動的に流れてきて、人が手を動かさずに木枠に手を添え受けるだけで紙漉ができるシステムになっていた。近年の台湾のやり方を導入したものだそうだ。均一に材料水が流れてくるを待つだけの機械的な紙漉は、わたしにはちょっと寂しい気もしたが、手を返さずにすむので腰や腕に負担が少なく、何より熟練した技が必要ないので、若い人でも作業が可能なのだそうだ。仕上がりにも多少の差はあるが大きな変化はないという。確かに、他の工場がかなり年輩のご老人ともいえる職人さんだったのに比べ、第 2 工場だけは、年齢層が若いのが特徴的だった。紙を乾かす作業にも、他では見かけなかった女性の作業員が採用されている。ここでは、若い息子さんの考え方が経営に反映されていることがわかった。

きっと中国では、これからさまざまな場所や場面で、日本がたどってきたような激しい近代化の波が訪れるのだろう。そうした流れの中で、得られる便利さと失われる古きよき伝統、二律背反どうしても避けられない問題も出てくるのだろうと思う。他の工場にいた職人さんの未来はどうなるのだろう。夾江の徐さんの手作りの紙に対する喜びや誇りは、若者にも受け継がれていくのだろうか？　でも、高齢になる職人さんを継ぐ人がいなければ、紙の未来もないわけで、若い人のやり方もまた否定することはできない。これから、中国の竹紙はどのような道をたどっていくのか。そして私たちもまた何をめざしてどこへ向かうのか？　そんなことを思いつつ、二代目工場長の若々しい横顔を眺めた。

今回の中国竹紙の旅では、実際に現地へ行き多くのことがわかった一方で、さらに疑問に思ったり調べたいこともまた多く生まれてきた。その一つに、一般庶民が竹紙をどのような用途で日常的に使っているのかということがある。今回は 2 カ所の竹紙の郷を訪ねることができたが、1 カ所は博物館、1 カ所は輸出を多く行う紙の会社ということもあり、庶民の利用状況には今一歩踏み込むことができなかった。しかし、町中で竹紙を見かけなかったかいえば、実は見かけた。どこで？　それは「仏具屋さん」である。仏壇の飾り物などを売っているようなところには、夾江の博物館や連城の竹紙会社で見たのより、ずっと粗くて安い、黄色い竹紙とおぼしき紙の束がよく売られていた。連城の江さんや通訳の莉芬に聞いたところでは、中国のお盆の時期には、日本の送り火や迎え火のような感覚で、竹紙を燃やす風習があるという。仏具屋さんに売っていた竹紙は、たぶんそうした目的のためのものだったのではないかと思う。以前、台湾でもお葬式のときに竹紙を使うと聞いたことがあるし、東南ア

ジアのミャンマーでも、寺院などで宗教的な用途に竹紙を使うと聞いたことがある。そんな竹紙はだれがどこで作り、実際どのように使われているのだろう。見たい思いが募る。

中国竹紙のバリュエーションについても、まだまだ知りたい思いが残った。私がこれまでに見た中国竹紙のほとんどは、薄くてなめらかな書道半紙のような紙だった。それらの主な用途は書や墨彩画であろう。けれども、日本でかつて生活のさまざまなシーンに紙が使われていたように、竹紙にもさまざまな形態があり、生活のそこここで使われた、というようなことはないのだろうか？　もしそうした歴史があったなら、それらを知ることが、これからの私たちの竹紙の未来を考えることにもつながっていくこともあるのではないか？　そんな思いも抱いた。

中国は広い。東西南北さまざまな地域にさまざまな人々が暮らしている。少数民族も独自の文化を持っている。そして中国の多くの場所に竹は生育している。中国だけではない。アジアを中心とした多くの地域に竹は生えているのだ。そこには私が知らない、竹から作られた竹紙がまだまだあるのではないだろうか？

今後時間はかかるだろうが、世界の竹紙を作っている人と使っている人の暮らしを、少しずつでも見ていきたいものだと思っている。そしていつか、世界の竹紙展の開催を実現させたいと願っている。